
晴れ時々BIOHAZARD

脳内戦争

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

晴れ時々BIOHAZARD

【Nコード】

N2889V

【作者名】

脳内戦争

【あらすじ】

ある晴れた日：町は地獄と化した。

町の住人達はウィルスに感染し、ゾンビと化した。

そしてわずかに残った生存者たち。彼らは生きてこの町を脱出できるのだろうか。

ゾンビ&改造生物VS生存者。

命を懸けた戦いが始まる。

（この小説はバイオのキャラクターは登場させる予定はありません。しかし、バイオの敵は登場するかもしれせん。作者が初心者のため

め、コメディ調、グダグダが続くことが予想されます)

プロローグ的な(前書き)

どうも初めまして。

初めて小説を書かしてもらいます。どうぞよろしくお願いします。

プロローグ的な

研究員A（以下A）「なあどうするんだ、例の件」

研究員B（以下B）「どうするも何もどうもできないだろう」

見るからに怪しい研究室で、見るからに怪しい研究員たちが話していた。

それは見るからに怪しい光景だった。

A「どんだけ怪しい使っただよ！」

B「ん？どうしたA？」

A「いやなんでもない…ていうか俺たちに名前はないのか？」

B「ああ、作者が考えるのが面倒くさいんだろう」

A「そ、そうか…ところでどうする？」

B「どうするも何も、なあ？C」

研究員C「俺に振るな。まあ放っているのが一番なんじゃないか？でもとりあえず回収しろ」

B「それもそうだな」

よし、と研究員たちが見るからに怪しい機会を操作し始めた。

A「それにしても、誰かあのボタンを押さなければいいが…まあ注意書きがあつたから大丈夫だろう」

見るからに怪しい研究室の中には見るからに怪しい機会を操作するもの、見るからに怪しい漫画を読み和むもの、どれだけ『見るからに怪しい』を言うんだと突っ込むものであふれかえっていた

ブローグ的な(後書き)

やはりグダグダだ…

あっ、最後まで見ていただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします

そもそも誰のせい？（前書き）

かなり長ったらしくグダグダな回です。

そもそも誰のせい？

?? 「なんてこった…」

一人の少年が自室の窓から外を眺めていた。彼の名は米田清田よねだせいだ中学二年生だ。

彼の眺めていた窓の外は異様な光景が繰り広げられていた。それは車は燃え、あたり一面血だらけだ。おまけに化け物がうようよいる。

清田「どうしてこうなったんだろう…」

清田が考え込む。

時間は前に戻り、二日前。もちろんまだ化け物はいない。

清田は友達を四人自室に呼び出し何やらボタンを見せびらかしていた。

清田「おい、見ろよこのボタン。これ押すとなんかなるんじゃないか？」

そんなことをにやにやしながら言っていると隣に座っていたメガネの男が突っ込んできた。

彼の名前は仙田風雅せんたふうが。清田と同じ中二だ。

風雅「何かなるって、何かなるんだよ」

清田「ほら、映画で有ったじゃんか。スイッチ押すと何円かもらえて人が死んじゃうやつ」

「でも」と向かいに座っていた女子が割って入ってきた。

清田は「またか」と頭を抱えていた。

女子の名前は陀尻春樹だじつはるき。こやつも中二だ。

ちなみにこの部屋にいるのは全員中二だ。

春樹「でも、その死ぬのは誰かが問題よ」

清田「そこかよ!!」

春樹「ん？なんで？」

清田「いや、ふつう」他人が死んで私たちだけお金をもらうのなんていや』とかだろっ」

春樹「だって…ネエー。お金はほしいじゃん」

はあー。とため息をついていると、「ばっ」と何かが手をかすめたかと思うと、手からスイッチが消えていた。

どこだ、まさかここらへんに出没する妖怪か！とあたりを探すとスイッチは隣に座っている男が持っていた。

ちなみに彼らは円状に座っている。

話を戻して、男の名前は一口ビンソン・双そつという。アメリカからの留学生だ。

双「マナー欲しいす。でもユーにボタン押されてミー死ぬのやです。だからミー押すです」

清田「待て待て待て。じゃあ死ぬのは誰だ？」

双「ユーです」

双の指先は清田を指していた。

そこに『バカバカしいです』と、これまた女子が割り込んできた。

女子の名前は郷楽花蓮しゆくかれん。ほかの人々とは違い制服で、真面目で、まさにお嬢様だ。

花蓮「そもそもそのボタンでお金がもらえらるとは限らないじゃないですか。それに裏に何か書いてあるじゃないですか」

ボタンの裏には『押すなよ！絶対押すなよ』と書いてあった。

清田「押すなと言ったら押すんじゃない！！」

清田はボタンを拳で殴るように押した。
するとボタンは『ピーピー』と音を鳴らし光始めた。

双「Oh!ー!ミーが死ぬのはごめんです」

ボタンを持つている双があたふたしている。

風雅「おい、まずいんじゃないか。爆発とかするんじゃないか!？」
清田「あたふたあたふた」

男子たちは頼りなく、あたふたしている。

花蓮はのんきにお茶を飲んでいる。

もう頼りになるのは春樹だけだ。君ならやれる。負けるな春樹。

春樹「もう…飛んでけー!ー!ー!」

双の手からボタンをぶんどり、かなりすごい投球力で外に投げた。

バキッ「うげっ!」

遠くからうめき声が聞こえた。

全員「「「ありゃ」「」」

外を目を凝らしてみるとラーメン屋のおやじが出前の途中らしくラーメン片手に倒れている。もちろん隣にはボタンが置いてある。

清田以外全員「「じゃつまた」」

清田「おい、待てよ」

言うが遅し、みんなはもういない。

清田「もう知らねっ、寝よ」

清田は布団にもぐった

そこで回想が終わる…

そして今。

清田「なーる、なーる。あれが原因か。…てっ俺のせい!？」

納得し、学校に行く準備をした

清田「こんな時でも学校あるかもしれないしね」

念のためバットを持ち、ドアから外に出た。

そもそも誰のせい？（後書き）

あのボタンの映画の名前は忘れましたw
あったことは確かです。

地獄の通学路（前書き）

自分、銃に対してあまり知識がないので、武器の名前とか間違えちゃうかもです。

地獄の通学路

清田「おりゃ、おりゃ。キモっ」

清田は、学校までの道に立ちふさがるゾンビたちに、バットの鉄槌を食らわしてやった。

しかし、バットだけじゃいくらなんでも無理だ。

バキッ。不吉な音とともに、清田の目に、バットが折れる光景が繰り広げられていた。

しかし、そこが都合主義。バットの破片が、そのまま、後ろから襲おうとしていたゾンビの鼻に、刺さった。ゾンビはもがき数秒後、二度目の三途の川を見ることになった。

清田「おお。ビンゴ大会で当てたバットだったのに…まあいいや野球やんないし」

バットの破片のもう一方をゾンビに投げつけ、裏路地から逃げた。

清田「おいおいおい、武器がないのはつらいぞ」

そんな事を言いながら、歩いていると、警察官の死体にありついた。その瞬間、清田は神と、作者に感謝することとなった。

警察官の手にはハンドガン。ベレッタM92が握られていた。

清田「成仏したまえ。お手手のしわとしわを合わせて幸せ。なーむ」
警察官に合唱し、ベレッタをもらった。

この時は清田は気付いていなかった。

後ろをゾンビに囲まれていたことを。作者が面白いことが思いつかないことを。

清田が先に気付いたのは、前者だった。ゾンビが清田に襲いかかる。

清田「なんだこの急展開！！」

清田は何もできなく、ただ立ちつくしてしまっている。ゾンビはもう目の前だ。

バンバン。清田が、恐怖におののき目をつぶっていると、銃声が聞

こえ、ゾンビが倒れていった。

清田「は、はへは(だ、だれだ)」

恐怖におののきすぎて、言葉もまともにしゃべれない。もうこんなやつは見てられない。

清田「そこまでいうことはないじゃんか」

ととと…話が脱線した。

清田の前に立っていた人物の顔は、清田が知っている顔だった。そこには、花蓮がいた。

しかし、花蓮は、清田が知る花蓮ではなかった。

左目に黒い眼帯をつけていて、銃を背中に大量にしょっている。

花蓮「おゝ危なかったじゃなーか清田よおー」

清田「え、えと花蓮さんですよね？」

花蓮「それ以外に誰というんだボケエ」

花蓮はアサルトライフル AK-47を清田に向けて連射した

清田「うわっ危ないっすよ」

花蓮「がははは。よけてよかったじゃねーか。」

清田「いやそれ以前になぜ連射を」

花蓮「まあ細かいことは気にするな。ほらよ、武器ありすぎてかさはるからやるよ。感謝しな」

清田「細かい事じゃねーぞ。…まあ武器はありがとよ。ところでなんだこれ」

花蓮「村田銃つつう猟銃じゃボケエ。じゃあ俺はこの愛車で学校までぶっ飛ばすぜ」

花蓮の後ろには、なんと戦車があった。それまで気付いてなかった清田が馬鹿なのか、戦車に乗っている花蓮が馬鹿なのか、わからない。

花蓮「あばよ!!」

清田「いやいやいや俺も乗せさせてくださいよ」

花蓮「いやいやこれは一人乗りのもので」

清田「いやいやその助手席は飾りですか」

花蓮「たつくうるせーな。助手席は飾りだよ。この砲台で灰にされたいか」

花蓮が試しに砲台で近くのアパートを撃った。アパートは大きな音を立てて崩れていった。

花蓮「あばよ」

戦車が見るみる遠くなっていく。

清田はそれを立ち尽くして眺めていた。

地獄の通学路（後書き）

良かったら感想ください。

地獄の通学路【其の二】（前書き）

かなーりグダグダです。

銃の名は、そのうち覚えられるでしょう（何回も確認or書き直した（泣））

地獄の通学路【其の二】

春樹「きゃあ！どいて」

マンションで女子中学生　　春樹がテニスラケットを持って、ゾンビに奮闘していた。

ゾンビを何匹も、相手にしたため、フレームは、血だらけ。ガットはぼろぼろだ。

と、その時、前の話と同じことがおきた。ラケットが真っ二つに折れ、それが後ろのゾンビの鼻に突き刺さる。ゾンビは、二度目の三途の川を見ることになった。

春樹「・・・前の使い回しね」

それだけ、彼らは運がいいということだ。

マンションを数分うるつき、マンションから無事出ることができた。見つけたものは、救急箱とキーピック。

と、その時。

??「動くな」

春樹「またまた急展開ね」

鋭い声が、春樹の耳に響いた。思わず両手を上げる。しかし、その声は、知っている声だった。

春樹「ふ、風雅!？」

風雅「おお春樹だったか!！」

そこには、風雅の姿があった。ちなみに風雅は、春樹と同じマンションに住んでいる。

風雅「おお、お前無事だったか。ほかのみんなは?」

風雅が、構えていた銃をホルスターにしまう。

春樹「私も今マンションから降りてきたところなの…。ところでその銃どうしたの?」

風雅「ああ。この銃は、警察官の死体から」

ハンドガンの、コルト・パイソンを見せた。

風雅「んで、こつちが、じいちゃんの外国のみやげ」

お次はリボルバーの、シングルアクションアーミーをみせた。

春樹「お土産って…ふつうお土産は食べ物でしょ…！」

風雅「そう言う問題か…！…まあお前にも武器を分けてやるよ」

春樹「本当！？アリガトー」

風雅「なんで最後カタコトなんだよ…！…まあ、まず二十六年式拳銃と」

その名の通り、拳銃を春樹に渡した。引き続き

風雅「それと、九七式狙撃中」

やはりその名の通り、狙撃中を渡した。

春樹「ふわっは　ありがとう」

銃に弾を装填し、狙撃中を背に背負った

春樹「これからどうする？」

風雅「そうだな。とりあえず学校にでも行かないか？コンビニよって」

春樹「そうね。じゃあ私は、ファミチキね」

風雅「ファミリーマートに行くのは決定なんだ…。」

春樹と風雅がそんなグダグダなことをやっている間、あの戦車（前回参照）は、学校に向かって走っていた。

いや、滑っていたと言った方がいいかもしれない。戦車は、ガソリンが尽き、坂をブレーキなしに下っていた。

花蓮「ちっ！…なんでこんな急な坂があるんだボケエ。しかも坂の下にはなんでガソリンスタンドがあるんじゃ」

絶対事故とかあるだろう。しかし、それをお構いなしに、戦車はガソリンスタンドに突っ込もうとしている。

花蓮「じょうがねーな」

なぜか日本刀を五本取り出した。戦車の上（ほら、あるじゃんよく機関銃とか撃つところ。え？わからない？…しれべてみてください）

な)からスポツと出て、キヤタピラに日本刀を突っ込んだ。
バキバキと日本刀が割れる音がした。一本つつ折れていく。
止まった。

ガソリンスタンドとの距離は、約1m。本当に都合がいい。
刀は、あと一本。しかも、もう折れきっている。

花蓮「さぶねーあぶねー。ここで油でもいれっか」
戦車にガソリンを入れ始めた。

皆が思い思いのことをしている間、金髪に中学生はゾンビに奮闘していた。

双「Oh！モンスターどもめ！！」

彼の事は、この後、書かれるか書かれないかはわからない…。
それが彼にとっての最大の恐怖だ。

地獄の通学路【其の二】（後書き）

戦車はレギュラー満タンで！！

双「meの活躍はまだなのか！！」

本当にどーでもいい話ですが、作者は、テニス部です（どうでもよすぎる…）

学校に着いたとー(前書き)

まあ、言えることは、お食事中の方は、見ない方がいいです
)

初のバイオの敵が出てくるぞ!!

学校に着いたどー！

花蓮に会ってから、早三時間。清田は学校に向かっていた。

一時間：通学路にしては、長すぎる。

別に分け合って遠くから来ているわけではない。

ふさがっている道や、ゾンビが大量にいる道を避けただけだ。

清田「にしてもなかなかつかねーな。花蓮は今頃学校に着いたかな」
車で作られたバリケードには、戦車が通った後のような、穴が開いている。

しかし、そこは火の海で通れない。

ちなみに今は、路地裏にいる。

清田「…にしても…おもしれーことねーな」

清田が沈黙になる。

そんな沈黙を吹き飛ばしたのは、ゾンビでも、清田でもなかった。

『たたたたた』何かが走ってくる音がする。途中、『グサツ』っと何かを切る音。何かを食べる音がした。

足音はだんだん近づいている。清田がベレッタを構える。春樹がフアミチキをほおぼる。

…最後は余計だった。

『ぐちゃ』っと地面にゾンビの死体が落とされるのが見えた。

暗闇から、足音の持ち主の、影が見え、光でその姿が現れた。

清田「うわっ！キモっ」

そいつは、緑色で、腕には、かなりでかい爪がある。

清田は、ゲームのバイオハザードを何回かやったことがあるので、そいつの正体は、すぐにわかった。

ハンターだ。

そいつは、爪と口に血がこびりついている。さっきの音はこいつだ。

清田「と、えっと。ナイスツミートウー。マイネームイスセイタ。

バーイ！！」

ためにし一発、村田銃を体に撃ち、逃げた。

無論ハンターも、一発で倒れるはずなく、追いかけてくる。
その目はまさに狩人^{ハンター}だ。

清田は考えた。あいつを倒すのは無理だ。では、あいつから逃げる術や、道具はないか。

清田は激怒した。道具は、ごみ箱と、ドラム缶しかない。ん？ドラム缶？

たたたたた。ハンターは、路地裏を清田を探すため、うろつき、ドラム缶を背に、別の獲物^{エサ}を探すため、路地裏から離れた。

皆さんお分かりの通り、清田はドラム缶の中にいる。

ドラム缶に開いた小さな穴で、ハンターが行ったのを見て、安心して、ドラム缶に入ったまま立った。

清田「見たか！！これがドラム缶の力じゃー！！」
そのまま、ドラム缶から出ようとしたが、今日は付いていない。

そのまま倒れ、ドラム缶に入ったまま転がっていく。

清田「ギヤアアア。そーいや、こんなのメタルギアにあつたなー
ー」

ドラム缶の中から、ぐちゃぐちゃと、何かをつぶす音がする。

どうやら坂に来たらしく、ドラム缶の回転が速くなる。

清田「まずい……」

清田は知っていた。

この急な坂の前には、ガソリンスタンドがある。

もし、運悪く、ガソリンが漏れていたら、大爆発になるかもしれない。

だが、今日は、やはり付いていた。

何かが台になったらしく、スタントマンのように、坂の勢いで、空高くとんだ。

そしてドンつとどこかに落ち、回転が止まった。

ドラム缶から出て、もちろん気持ち悪くなり、吐く。

清田「うえー！。酔い止め飲んどくんだった。」

一週間分ぐらい、出したような気がする。

出るものが出終わり、顔を上げると、そこには、学校があった。

清田「めっちゃ都合いいじゃん。で、めっちゃ手抜いてんじゃない」

腹を押えながら、学校の肛門…いや、黄門に入った。

清田「校門だろ…」

その時花蓮は。

花蓮「ふー！。ガソリンは入れたし、戦車はきれいになったし」

戦車の上の部分を掃除するため、戦車の後ろの、板を掛ける。

お分かりの通り、ドラム缶が転がってくる。

花蓮「ギャー！なんじゃありやー」

転がってくるドラム缶に、アサルトライフル、マシンガン、グレネ

ードランチャーまで、撃つ。

しかし、ドラム缶には、効果がない。『どんだけすごいドラム缶なんだ』という、突っ込みは、無だ。

花蓮「うわっ！！」

戦車から離れ、ドラム缶をよけると、ドラム缶はさっき掛けた板を台に、大空に飛び立った。

花蓮「なんだったんだあれ」

空飛ぶドラム缶を写真に収めた。

この写真が、のちに、UFO写真として、大騒ぎになるのは、また別の話だ。

学校に着いたとー(後書き)

感想。ご意見。駄目だし。待ってます!!

その頃皆さんは…（前書き）

遅れてすみません!!

大体一週間に一話のペースで投稿していきたいと思います（もしかしたら、それより早いかもしれないし、遅いかもしれない）

その頃皆さんは…

もつろろな意識の中、ベットに倒れこむ清田。

それもそのはずだ。清田はドラム缶で、少なくとも800mも転がったのだ。

清田「ああー気持ちわりー」

校門に入った後、とりあえず横になりたいので、玄関から一番近い保健室に入った。

清田「まったく、ドラム缶に入って転がったのは誰のせいだ」

いや、お前のせいだよ清田。

清田「いや、俺のせいじゃない。あいつのせいだ。あの緑色のハンターのせいだ」

一向に自分のせいだと認めない清田。

こんな寝っころがつている清田を見ている、何にも面白くないので、ほかの皆を見てみよう。

春樹&風雅

春樹「まったく肉まんが売り切れなんて、どうゆう事よ」

風雅「しょうがねーだろ。ファミチキがあっただけラッキーだろ。ほら行くぞ」

天然な春樹のボケを、冷静に受け流す風雅。

ちなみに彼らは、某コンビニにいる（ちよっと前の話で言っちゃってるね）

風雅「ほら。さっさとこのフ ミリ〇マ〇トから出るぞ」

缶詰や、食料、飲み物がいっぱい入ったカバンを持ち、春樹に怒鳴る。

春樹「なんで伏字なの？ここは、思い切ってたせばいいじゃない。それに前も言ってたじゃん。」

風雅「いや、今になってなんか怒られそうって気付いたんだよ」

春樹「じゃあ、当て字を使ったらどう？ファエ璃ー摩ー賭とか」

風雅「逆に怒られるは!!!」

春樹「じゃあ何で、私たちは、ここにいるの？別のコンビニでもよかったです」

風雅「お前が行きたいって言ったんじゃろ!!!」

もう風雅は、怒りが抑えられなくなり、銃を構えだした。

春樹「わかったわかった。タイムタイム。じゃあ、今までのこと、全部やり直しましょう。」

風雅「どうすんだよ」

春樹「一回缶詰とかをここに戻して、別のコンビニに行きましょう。文句ないでしょ」

風雅「文句あるわー!!!」

風雅は、シングルアクションアーミーの引き金を引いた。

時間を少し戻して花蓮。

花蓮「ふー終わったぜー」

戦車を直し、改造までもした。

今までゾンビに襲われなかったのは、彼女がただ単に運が良かっただけなのか、ガソリンスタンドの周りに地雷を埋めたからなのか。

花蓮「よし、こいつが直った祝いの出血大サービスじゃー」

ドーンと空に向かって大砲の弾を打ち上げた。

風雅&春樹

引き金を引こうとしたその時、戦車女が発射した弾が、コンビニに激突した。

風雅&春樹「.....」

風雅「なんだこの弾はー!!!」

風雅は思わず、銃をおろした。

春樹「きつと、神がお怒りになったのよ」

風雅「そうか。人間争いをやめるとおっしゃてんのか」

いや、戦車女が発射したんです。

風雅「しかし、この弾、戦車の弾だぞ」

春樹「じゃあ、きつと恐ろしい魔王的なものが、飛ばしてきたのね」

風雅「いや、魔王はないと思う。せめて、俺らを邪魔だと思っ輩が撃つただと思う」

いや、あんたらの知り合いが撃つたんです。

風雅は、食料や缶詰、水が大量に入ったカバンを。

春樹は、懐中電灯や無線、その他の日常用具の入ったカバンをしょった。

風雅「とりあえずここは危険だ。出るぞ」

春樹「じゃあどこに行くの？」

風雅「とりあえず学校に行こう。誰かいるかも」

二人は、コンビニから出て、学校に向かった。

その頃、双は。

双「おお無事にs c h o o lに着いたネ。とりあえず保健室に行くネ」

地味に学校にしていた。

その頃皆さんは…(後書き)

ただ今、あとがきのコーナーを創設中…

よろしければコメントを…!

そして学校へ……（前書き）

遅れて申し訳ない；
進展のない回です。

そして学校へ……

清田「茶はうめーな」

風雅「そのとうりだなトメさん」

この際トメさんって誰だなんて突っ込みは不要だ。

全話から数十分後、皆は学校に集まった。

花蓮の戦車は途中で壊れて捨てたのだそうだ。

清田「あんなチート武器、なんで壊れた」

花蓮「ん？改造したら、壊れた」

風雅「そんなことより今後について考えよう」

双「とりあえずフードをgetするのはどうでしょう」

双の提案には皆が賛成した。しかし。

花蓮「よし、じゃあ俺たち四人はデパートに行く。」

双「wait五人じゃないんですか」

花蓮は双に目をやった。

花蓮「双、お前には重大な任務をやる。めっちゃ重大だ。重大すぎて、渋滞が起きる」

双「oh最後のはわかんなかったけど任務ってなんですか!？」

花蓮「双、君には、この学校を探索してもらおう」

双「・・・それは何のジョークですか？」

花蓮「君にしかできない。君しかいないんだ。……捨て駒は」

双「捨て駒って何？俺死ぬの？」

花蓮「じゃあ、俺達はもう行くから。」

清田「がんばれよ。」

風雅「アディオス。幸運を」

春樹「貴方には、もう会えないかもしれないわね。」

花蓮「大丈夫。骨は埋めてやる。」

双以外皆は、保健室から出た。

双「……………行っちゃった」

そんなことをしている時、ある研究室で。

研究員A（以下A）「クソっどうなってやがる。証拠を消すどころか、生存者がいやがる」

研究員B（以下B）「おい、ボスから連絡だ。」

Bは監視カメラのモニターをボスの顔が映った画面に切り替えた。

ボス「久しぶりだな。研究員の諸君」

モニターには、サングラスをかけたボスと呼ばれる男が映っている。ちなみに、ウエスカーとは関係が無い。

研究員C（以下C）「ボ、ボス……」

ボス「で、あれは…ウイルスがまかれた町はどうなっている？」

A「あ、あれはそ、その生存者が何名か残っているみたいですよ」

ボス「おお。それは大変だ。証拠とか外に持ってかれた、僕達の会社は潰れちゃうよ」

B「は、はいわかっています。今、方法を考えております」

ボス「別に僕はこんな会社どうでもいいんだけど、君たちが困るだろう。急がなきゃねー。僕より上の連中がうるさいよ」

C「でも、どうすれば」

ボスはサングラスの中の冷たい目を笑わせた。

ボス「あれだろ、アンブレラから、取引でもらったB・O・Yとかいうやつがあるだろう」

B「あの、B・O・Wです」

ボス「まあ、細かいことは気にしないで。そいつらをさっさと町に送りこんだら」

C「もうすでに『ハンター』と『リツカ』と『リーパー』を送り込んでおります」

ボス「それだけじゃたりなさそうだねー。生存者の一人は、戦車乗ってるし」

A「では、もつと送り込みます」

ボス「じゃあ、『タイラント』とかいうやつもね。」

B「あ、あの最終兵器をですか。そこまでしなくとも」

ボス「やるうと思えば核ミサイルとかで吹き飛ばせるんだけどさー。それだどつまんないじゃん」

C「はあ？」

ボス「だから、つまんないジャン。それに戦闘データとかなんだかとれんじゃん」

A「あ、ああそうですね」

ボス「必要なら、研究中の奴をだしな」

B「あ、あの改造者達ですか？」

ボス「ああ、そつだ。」

ボスはにっこりと笑い、神を見るように天を見た。

ボス「すべては、爪痕を残し、きれいに消える。宇宙cosmosのような綺麗blacksな闇のように」

そして学校へ……（後書き）

よろしければコメントを。

最後のボスの言葉の意味は、自分でも考えてません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2889v/>

晴れ時々BIOHAZARD

2011年10月9日13時26分発行